

自閉症スペクトラム障害児における視線特徴とその診断的有用性
樋口隆弘、石崎優子、則武厚、柳本嘉時、小林穂高、金子一成
小児科学専攻第3学年

背景と目的

自閉症スペクトラム障害（以下、ASD）児の支援においては、社会的コミュニケーションスキルを向上させるために、早期発見と早期療育が重要である。しかしながら、現在、ASDの診断は主観的評価法が主であり、いまだに客観的評価法は確立されていない。本研究の目的はASD児の日常生活場面における視線滞留時間を定型発達（以下、TD）児と比較し、幼児期における早期発見法を開発することである。

対象と方法

対象は就学前（3～7歳）のASD児16名（男児12）とTD児34名（男児11）である。i View X（SMI, Germany）を用いて、1人以上の人が映っている社会的場面の視覚刺激をそれぞれ9秒間12枚提示した。その際の、被験者の視線運動を記録し、それぞれの視覚刺激におけるROI（Region of Interest）の視線滞留時間を、マンホイットニーのU検定とROC（Receiver Operating Characteristic）曲線にて解析した。

結果

ASD児とTD児を比較して、12枚の視覚刺激のうち9枚で有意差が認められた。ASD児は人の顔における視線滞留時間が有意に短かった（ $p < 0.05$ ）。ROC曲線においては高い感度と特異度が得られた（感度：93.1%、特異度：66.7%）。さらに、2人のTD児に対して再現性を検討したところ、前後で高い相関が見られた。

考察

本研究の視覚刺激に基づいて視線解析を行うことで、ASD児とTD児を効率的に鑑別することが出来た。ゆえに、ASD児を発見する客観的評価法として、視線解析は有用である。今後、直接的支援に活用するためにも、より現実場面に近い動画での検討や学校の教室場面での解析を進めていきたい。